

平安朝の色好み像 雨海博洋

りにけるより、あだなる歌、はかなき言のみいでくれば、色好みの家に埋れ木の、人知れぬこととなりて、まめなる所には、花薄ほに出だすべきことにもあらずなりにたり。

当時の世の中が派手で、人の心も華美に流れ、浮いた歌や真実味のない作ばかりが詠まれ、従って当世の歌は色好みの家のみ姿をかくし、まじめな公の場には出せない代物になっってしまったという。即ちこの場合の色好みの

歌は「あだなる」「はかなき」歌であって、「まめなる」ものではなかったということになる。また竹取物語の五人の貴公子も「色好みといはるるかぎり」の人であり、「すこしもかたちよしと聞きては、見まほしうする人どもなり」とあって、あだなる貴公子として登場している。そこで五人の貴公子は、かぐや姫を物も食わず思い続け「十一月、十二月の降り凍り、六月の照りはたたくにも、障らず」やってきた。しかし何れも戯画化されて失敗に終わってしまう。帝のごとく姫の心に深く思慕されることはなかった。彼等はあだなる色好みであったからである。

王朝の真の色好みは六歌仙の、特に僧正遍昭・在原業平・小野小町などの世界を通して

平安朝の和歌でも、物語でも、「色好み」ということを無視しては語れない。しかし、この言葉ほどわかっていようであまいいなものはない。所謂好色であるとか、情趣的恋愛であるとか、いろいろの釈義が与えられている。これにはこの語の発生と展開上に反映された時代的意味があつたのであろう。くわしく説く紙幅がないので、簡単に述べるなら、元来「いろ」は「いろ妹」「いろ背」の「いろ」であつて、愛す対象へのひたすらなる親しみ、思慕の情を表す言葉であつた。一方、与謝野寛が、「いろ」は美しい色彩をいう「艶」Yenの別音Eの語尾をラ行音に転じたもの。また男女の放縦は情交をいう「淫」Eの語尾をラ行に転じたもの（日本語原考）と

今集假名序の次の一節である。

今世の中、色につき、人の心、花にな

形成されたと思われる。古今仮名序であだない色好みが批判されていたが、同じく仮名序で六歌仙評に入る前に「ここに、古のことも、歌の心をも知れる人、わづかに一人二人なりき」とか「古のことも歌をも知れる人、よむ人多からず」とあつて、次に「近き世にその名聞えたる人」と遍昭評に入る。とすれば六歌仙は歌の心を得、歌を詠めた数少ない代表であることになる。もともと「これかれ得たるところ得ぬ所、たがひになむある」と六歌仙もそれぞれ批判されている。しかし遍昭・業平・小町の三人は各評を通して見て、ある色好みのイメージを作り上げたものといえよう。業平は色好みの代表として伊勢物語の中に昔男として典型的色好みの理想像として書かれている。遍昭は仁明天皇時代、良少將と呼ばれ「いと色好みになむありける」（大和一六八段）と、また小町は伊勢物語二六段に「色好みなる女」として扱われている。

色好みとあるからには求める対象に向つてひたすら迫っていくのが大前提ではあるが、ただそれだけでは真の色好みではない。更に雅やかな教養が強く要求される。本能的肉体的世界だけではなく、精神的想念の美的世界が重んじられてきたからである。その表現手

段として和歌が重視されたのは言うまでもない。「天の下の色好み」といわれた源の至が詠んだ歌が平凡だったので「天の下の色好み」の歌にては、なほぞありける」評されている。色好みらしく相手の心に迫る情と知の洗練された歌が相応しいというのである（勢語三九段）。その点、東五条邸に通つていた男が、通路の築地の穴に番を立てられ、通うすべく詠んだ

人知れぬわがよひ路の関守はよひよひごとにうちもねなむ

の歌は、男との恋を許さなかつた主人の心をも動かしたのであつた（勢語五段）。

本当の色好みは「まめなる」（誠実な）人であつた。それ故真の恋に行き当つた時は自ら苦しまねばならなかつた。東国をさすらう折、武蔵国で巡り逢つた三芳野の里の女は藤原貴族の血を引くだけあつてひなには稀れな美人であつた。孤愁をかこつ男にとつてはこ

の上的ない心慰みであつた。しかしこれが本当の恋となればなるほど苦しく、都に残してきた恋人に訴えずにはおけなかつた。訴えることによつて京の女をも苦しめ、更に自らを苦しめることがわかつていても「まめ男」はかくなかつた。本当の恋と本当の恋が対立し

た時、絶対的真實の恋へ帰結を自ら求めなければならぬ苦惱であつた。「かかる折にや人は死ぬらむ」（勢語一三段）と詠じている。また色好みはかけられたまたは求められた情をないがしろにはできなかった。たとえ相手を愛していなくても、かりそめなりともその恋をかなえてやらなければならなかつた。男が陸奥国をまどい歩いていた折、この貴公子に一途なる慕情を寄せた乙女があつた。容姿も歌もひなびていたが、男は一夜のかりそめの情をかけてやる（一四段）。また子供三人を女手一つで育て上げた老女が、ふと無為に終つてしまう人生をはかなみ、思い出に残るような恋を欲した。その恋をかなえてやつた。

たのも在五中將であつた（勢語六三段）。このような温い思い遣りも色好みの一要素であつた。

古今集や古代物語に記された洗練された色好み像は更に源氏物語の光源氏に昇華され、やがて平安朝末期には始めに説いた「淫」の要素が強く入り墮落して行くことになる。